

～大正中津川で見つけた地域資源とその生かし方～

1. 集落の産業史の掘り起こし

昔、集落で採取出荷されていたという林産物「松脂」の記録と、いまだ残る採取現地を確認することができました。松脂とは、松から採れる樹液を固めたものです。現在でも松脂を精製して、ブラジリアンワックスや製紙用サイジング剤、バイオリン松脂などに使用されています。

採取地にあるアカマツは幹がむき出しで、松脂を採取するために付けた多数の切り傷跡が残っていました。小さく切られて灰色になった切り株になたで切り目を入れると、光沢のある樹脂がまだたくさん詰まっており、木は切られてもずっと生きているようでした。



2. 昔話の絵本化

集落に昔から伝わる民話「てつがんぼうさま」。集落の子どもたち、さらには地域に訪れる観光客の子どもたちにも読んでもらいたいと願って絵本に仕上げました。この絵本は四万十町内の小学校の読み聞かせにも使っていただいています。

「てつがんぼうさま」とは、主に皮膚病にご利益があると伝わっています。今回絵本化した「てつがんぼうさま」は、徳広誠男さんが記録した「中津川民話」を基に作成しました。しかし、大正中津川にはそのほかにもさまざまな形で語り継がれており、それぞれの「てつがんぼうさま」の内容は微妙に異なっています。共通しているのは、「皮膚病」を治すということだけです。子どもの頃に「虫歯」や「漆かぶれ」を治すために参拝したという方もいらっしゃいました。



3. 昔の写真のデジタル化

集落内に残されていた50年前の写真（約500枚）をデジタル化し、2月18・19日にオーテピア高知図書館にてミニ写真展を開催しました。デジタル化することで簡単に見ることができ、故郷を離れて住むかつての住民、大正中津川ファンの皆さんも容易にアクセスすることができます。

この写真は、1976年に写真家の田辺哲郎さんが開催した「ぢかたび写真展」の展示を源泉としています。「ぢかたび」の名は都市集中・経済成長期の価値観に対して「よそいきを着てあらたまっていく展覧会でなく、地下足袋野良着の日常の中に展覧会があってもよいではないか」という山村からの主張でもありました。その思いと表現の斬新さは注目され、TV新聞各社の取材も受けたほどでした。



大 正 中 津 川

と

高 知 大 学

の

取り組み

高知大学地域協働学部は四万十川振興室と共に2020年から大正中津川集落で、集落の自然や農村景観、産物、食文化、伝統文化などの中にある「地域固有の資源（地域資源）」探しと、その地域資源を集落のために生かそうという取り組みを続けています。

???

Q なぜ「地域資源」を探すの？

A 「地域資源」は魅力的な観光資源になるから

「地域資源」とは、自然や農村景観、産物、食文化、伝統文化などを指します。「地域資源」には多くの可能性があります。例えば、従来の観光は、ただ自然景観や食を一方的に（体験）消費していただけでしたが、「そこだけの、その土地だけの、個性やアイデンティティを求め、その土地を繰り返し訪れる」という地域を大切にする旅も非常に魅力的です。その中で、「地域資源」はとても魅力的な観光資源になります。つまり、「地域資源」は「地域の宝」なのです。

そんな「地域資源」は、集落の皆さんの日常の中に埋もれて自分たちでは気付いていないことも多いです。それを見つけるのに、学生の新鮮な外部の視点が大いに役に立ちました。

